

全学共通教育の平成 23 年度実施に 向けた研修会 (FD) 報告

大学教育開発センター調査研究部編

第 1 部「全般的課題」では、来年度から実施される全学共通教育新カリキュラムについて、その経緯と理念、内容、運営方法という 3 つの面から説明がなされた。続く第 2 部「分科会」では、授業担当者を中心に 5 つの分科会に分かれて、より具体的な討論と情報交換をおこなった。

日時：平成 21 年 12 月 14 日 (火) 13 : 30 ~ 17 : 00

場所：教育学部 621 講義室ほか

対象：全教員 (特に、平成 23 年度全学共通教育担当予定の教員)

第 1 部 全般的課題

1. 全学共通教育新カリキュラム改革について
2. 平成 23 年度全学共通教育カリキュラム実施について
3. 平成 23 年度全学共通教育カリキュラム運営について
4. 全学共通教育事務手続

第 2 部 分科会

1. 主題 A 分科会
2. 主題 B 分科会
3. 学問基礎科目分科会
4. 教養ゼミナール分科会
5. 既習外国語分科会

※予定されていた初習外国語分科会は参加者が集まらなかったため実施されなかった。

以下、当日の提題者と書記が中心となって報告原稿を作成し、研修会の企画・実施にもあたった大学教育開発センター調査研究部が編集をおこなった。

【大学教育開発センター調査研究部】櫻井佳樹 (調査研究部長・教育学部)、高木由美子 (教育学部)、岸野薫 (法学部)、宮脇秀貴 (経済学部)、新井明治 (医学部)、吉田秀典 (工学部)、伊藤文紀 (農学部)、葛城浩一 (大学教育開発センター)、佐藤慶太 (大学教育開発センター)、岩中貴裕 (大学教育開発センター)

【その他の執筆者・資料提供】武重雅文 (大学教育開発センター長・教育学部)、田中健二 (共通教育部長・教育学部)、川畑朋昌 (修学支援グループ)

FD 研修会報告 第1部・全般的課題

司会：櫻井佳樹（大学教育開発センター調査研究部長）、記録：佐藤慶太（大学教育開発センター）

1. 全学共通教育新カリキュラム改革について

武 重 雅 文（大学教育開発センター長・教育学部）

来年度から、新しい全学共通教育カリキュラムが実施される。今日は新カリキュラムの準備としてどのような作業が大学教育開発センターで行われてきたのか、その成果がどのように新カリキュラムに生かされているかについて述べる。

新カリキュラム実施のために、大学教育開発センターでは平成20年度から3ヶ年計画で作業を行ってきた。まず平成20年度には、全国100大学を対象にしたアンケート調査と、先進的な取り組みを行っている大学への訪問調査を行った。平成21年度には、本学全学共通教育の全授業を対象に、シラバスの内容を点検する作業を行った。これらの作業を行うことによって、本学の全学共通教育の課題が、3点浮かび上がってきた。第一に、全学共通教育の到達基準（学部におけるディプロマ・ポリシーに相当）を明確化し、学生への周知体制を確立しなければならないこと、第二に、一貫した学士課程教育が成就するために、順次性のあるプログラムを構築しなければならないこと、そして第三に、全学共通教育を運営するにあたって、中核部隊ともいべき教員組織が必要であること、この三点である。詳細については、『「21世紀型市民」育成のための全学共通科目カリキュラム構築に向けて 報告書』（大学教育開発センター 2009・2010）をご覧ください。

これらの課題を睨みつつ打ち出されたのが、来年度から実施される新カリキュラムである。全学共通教育新カリキュラムの概要は、田中共通教育部長の説明に譲り、ここでは3つの課題の析出がカリキュラム改革においてどのように活かされているか説明することとする。第一の課題に対応する形で、全学共通教育の特性を考慮した5つの教育目標を設定した。これらは、①21世紀社会の諸課題に対する探求能力、②課題解決のための汎用的スキル（幅広いコミュニケーション能力）、③広範な人文・社会・自然に関する知識、④地域に関する関心と理解力、⑤市民としての責任感と倫理観である。これらを香川大学共通教育スタンダードと呼び、新カリキュラムの中核に設定した。新カリキュラムの各科目は、それぞれのスタンダードと対応した役割を担うようになっている。併せて、カリキュラムに対応した到達基準（学部におけるディプロマ・ポリシーに対応）も設定した。

第二の課題に対しては、水準コードを設定することによって、各々の授業のレベルを可視化し、全学共通科目と学部開設科目との有機的な連関を構築するための基礎を整えるという仕方で対処した。

第三の課題について言うと、全学共通教育コーディネーターを30名程度選出するという制度変更がこれに対応している。コーディネーターの方々には全学共通教育の企画、運営に関して中核を担うことが期待されている。

もちろん、全学共通教育において、従来通り全学出動体制が必要になることは言うまでもない。こ

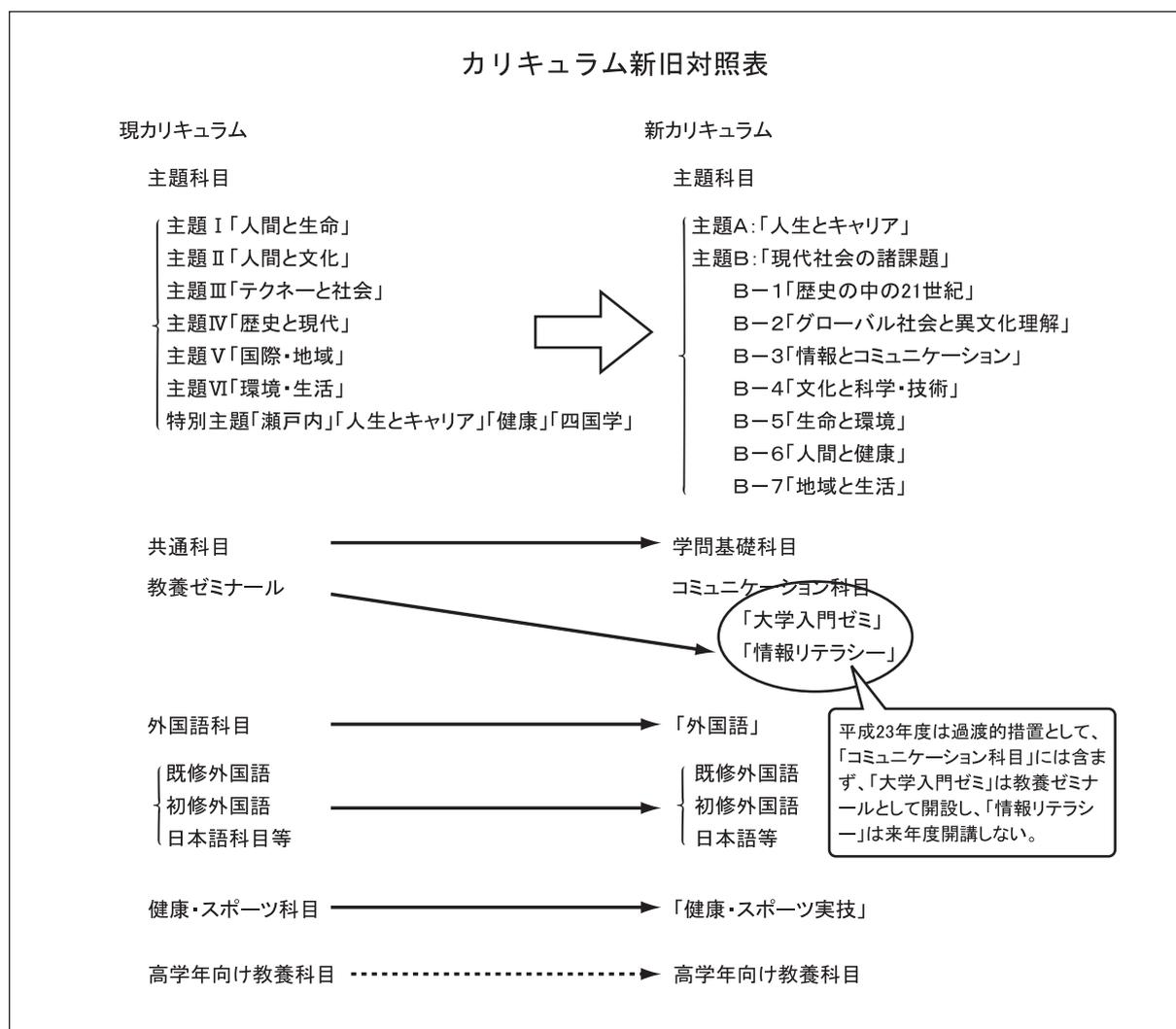
れまでと同様のコマ数を負担していただかなければ、全学共通教育の制度は崩壊してしまう。この点に関しては、今後とも各学部の教員の方々の協力をお願いしたい。

2. 平成23年度全学共通教育カリキュラム実施について

田中健二（大学教育開発センター共通教育部長・教育学部）

来年度から実施される新カリキュラムの概要について、新旧対応表に即して、説明を行う。

新カリキュラムの各科目は、「香川大学共通教育スタンダード」の各項目と対応している。主題A「人生とキャリア」は、⑤「市民としての責任感と倫理観」に対応するもので、来年度入学生からの必修科目（2単位必修）となる。主題Bは、①「21世紀社会の諸課題に対する探求能力」に対応する。主題Bは「歴史の中の21世紀」、「グローバル社会と異文化理解」、「情報とコミュニケーション」、「文



化と科学技術」、「生命と環境」、「人間と健康」、「地域と生活」の7つの授業群からなる。主題Bは従来の主題科目の枠組みを引き継ぐが、来年度入学生から、一つの主題に限定して単位を積み上げなければならないという縛りが解かれる(主題Bの授業群から6単位以上を履修が必要)。学問基礎科目は、③「広範な人文・社会・自然に関する知識」に、コミュニケーション科目は、②「課題解決のための汎用的スキル(幅広いコミュニケーション能力)」に対応する。新カリキュラムでは、従来の「健康・スポーツ科目」が「健康・スポーツ実技」として、コミュニケーション科目に属することとなった。なお、「大学入門ゼミ」と「情報リテラシー」は過渡的措置の対象となる(現在学部で開講されている科目と内容上重複する部分があるため)。平成23年度はこれら二つを「コミュニケーション科目」には含まない。「大学入門ゼミ」は「教養ゼミナール」として開講し、「情報リテラシー」は来年度開講しない。その他、高学年教養科目に関しては変更がないが、今後副専攻制度のうちに発展的に解消される予定である。

3. 平成23年度全学共通教育カリキュラム運営について

櫻井佳樹(大学教育開発センター調査研究部長・教育学部)

これまでの説明にあったように、新カリキュラムの各科目は香川大学共通教育スタンダードおよび到達基準に対応する形で設定されており、各科目には水準コードが定められている。水準やスタンダードとの対応関係を学生に対して明確な形で示すために、来年度からシラバスの記入に関して、担当の先生方に留意して頂きたいことがいくつかあるのでそれを説明したい。

まず、基礎情報となる水準コードと香川大学共通教育スタンダード、到達基準について説明し、その上で記入上の注意を説明する。

水準コードは大学院科目を含む香川大学のすべての授業に適用されるもので、①学士課程教育導入科目、②汎用的スキル育成科目、③基礎科目、④専門科目、⑤専門発展科目(大学院)、⑥先端技術科目(大学院)、⑨教職等資格関連科目、⑩その他、の8種類の番号からなる。全学共通科目に関して言えば、学問基礎科目のうちリメディアル科目と大学入門ゼミ(次年度は教養ゼミナール)は①、情報リテラシー、外国語科目、健康・スポーツ実技は②、主題科目(A、B)、学問基礎科目は③、という仕方でコード化が行われる。

すでに述べられたように、全学共通科目に関しては、①「21世紀社会の諸課題に対する探求能力」、②「課題解決のための汎用的スキル(幅広いコミュニケーション能力)」、③「広範な人文・社会・自然に関する知識」、④「地域に関する関心と理解力」、⑤「市民としての責任感と倫理観」、という5つのスタンダードが策定された。これに対応するのが以下の7つの到達基準である。

- ① 21世紀社会の現状を理解し、その課題と解決策を自己と関連づけて探求することができる。
- ②-1 日本語の言語表現を適切に理解し、自らの見解を文章や口頭で分かりやすく伝えることができる。

- ②-2 情報伝達に関わる問題を理解するとともに、情報の適正な選択、利用のための基礎的な技能を習得する。
- ②-3 異文化について開かれた態度をとれるようになるとともに、一つ以上の外国語において、読み、書き、聞き、話すための基礎的な能力を身につける。
- ②-4 健康で文化的な生活習慣を営むとともに、集団の一員として行動することができる。
- ③ 人類の文化、社会および自然についての幅広い知識とともに、学部専門課程を進んでいく上で必要な学問的基礎を身につける。
- ④ 地域社会の現状と課題に関心を持ち、自己と関連づけて理解することができる。
- ⑤ 社会において自己が果たすべき役割や、市民としての責任ある行動について理解を深め、そこから自己や社会の未来について考えることができる。

これらの到達基準と全学共通科目は、さしあたり科目レベルで次のように対応している。すなわち、①には主題B、②-1には大学入門ゼミ、②-2には情報リテラシー、②-3には外国語、②-4には健康・スポーツ実技、③には学問基礎科目、④には主題B-7、⑤には主題Aという対応である。

これらを踏まえて、シラバスの記入に関しては次の3点に留意して頂きたい。まず到達基準について。上述のことから分かるように、到達基準は担当する科目によってすでに最低ひとつは決定されている。担当者は、その他の到達基準をひとつ追加することができる。したがって、ひとつまたはふたつの到達基準を選択していただきたい。なお、到達基準に関してはシラバスのフォーマットに記入項目がないので、選択後、別途修学支援グループに提出することとなる。

次に、シラバスの「授業の目的・達成目標」の書き方について。ここでの記述は、学生を主語として「[学生が] ○○できる」という表記にする。

最後に、授業回数について。来年度から授業の回数が15回となり、試験は15回の外に置かれることになった。そのため、15回分の授業計画を書くことが必要となる。試験は15回のうちに含めないよう注意が必要である。

なお、来年度シラバスから、上記の点に関してシラバスの内容をチェックする制度を導入することとなった。必要な場合（未記入、間違い、勘違いなど）があった場合には、修正をお願いする場合がある。

シラバスの提出期限は1月中旬。この寒い時期に、シラバス記入という寒い作業をお願いすることは大変恐縮だが、よりよい全学共通教育のために、ご協力をお願いする次第である。

FD 研修会報告 第2部・分科会

1. 主題A分科会

司会・記録：葛城浩一（大学教育開発センター）

本分科会では、主題A「人生とキャリア」の趣旨及び基本の方針に沿って各授業が行われるよう、授業担当者による打ち合わせが行われた。参加者は、授業の概要、授業の目的・達成目標、授業計画等についての現段階での案について報告を行い、その後質疑応答が行われた。その結果、当初の計画を一部修正することが確認された。すなわち、当初、主題Aでは、授業担当者がペアとなり、授業内容を相談しながら、自分では提供できないコンテンツを1時間以上相互に提供しあうことを計画していた。しかし、授業が実際に行われていない段階でそれを行うことは難しいという共通見解に達し、少なくとも来年度に関してはそれを見合わせることにした。ただし、授業担当者がペアになることに関しては、他の授業担当者の授業を見学する契機になるなど、FDの観点から意義があるという意見でまとまった。参加者からこうした前向きな意見が得られたのは、参加者自身が教育熱心であることも大きいだろうが、どの授業（案）も非常に魅力的な内容であることも大きいだろう。授業担当者がお互いの授業に学ぶことで、主題Aのさらなる充実が期待される。

2. 主題B分科会

司会：櫻井佳樹（大学教育開発センター調査研究部長）、記録：川畑朋昌（修学支援グループ）

本分科会では第1部に引き続き、主題B「現代社会の諸課題」について授業担当者の理解をより深めるため、資料に基づき主題Bが対応する香川大学共通教育スタンダードの①「21世紀社会の諸課題に対する探求能力」と④「地域に関する関心と理解力」、適用される到達基準の①「21世紀社会の現状を理解し、その課題と解決策を自己と関連づけて探求することができる」と④「地域社会の現状と課題に関心を持ち、自己と関連づけて探求することができる」、及び水準コードの③「基礎科目」について、大学教育開発センター調査研究部長から説明があった。併せてシラバスを執筆するうえでの注意点、B-1からB-7各区分の構成、及び趣旨についても説明があった。続いて参加者が来年度の授業を担当するにあたり、自身が考えている授業内容や疑問点、普段の授業に関して注意している点や困っている点などについて各人が発表した。それらについて参加者の間では活発な討論と質疑応答が行われ、貴重な情報を共有する良い機会となった。

3. 学問基礎科目分科会

司会：吉田秀典（調査研究部委員・農学部）、記録：新井明治（調査研究部委員・医学部）

本分科会では、これまで共通科目を担当されてきた 2 名のゲストスピーカーから、最近の学生の学力低下や授業態度の現状に関する話題提供を受けた後、質疑応答や実践例紹介を交えたディスカッションが行われた。

(1) 文系科目の実例報告

まず歴史学を担当されてきた中谷博幸先生（教育学部）から、講義に対する学生からの質問内容を例として挙げながら、「学ぶための準備ができていない」学生の現状が紹介された。具体的には、「講義を理解するために必要な基礎知識が備わっていない」、「学生の 3 割は文章を書けない」、「ノートにとることができない」等の事例が挙げられた。

(2) 理系科目の実例報告

次に、数学と物理学を担当されてきた品川一成先生（工学部）から、学力レベルと学習態度に分けて、最近多く見られるようになってきた学生の問題が紹介された。

- a) 学力レベルの現状：小中高校で習う基礎的事項を習得していない、計算の基礎訓練が足りない、計算手順は暗記しているが応用ができない、表面的な理解しかできていない、論理性がない、好奇心や観察力が足りない、想像力がない……等。
- b) 学習態度の現状：未成熟（注意しても私語をやめない）、向上心の欠如（教科書を忘れる、読まない、ノートをとらない）、レポートはコピーで済ませる、宿題を提出しない、理解困難な概念を理解しようとしめない、授業時間以外は勉強しない、理解できないのは全て教師側の責任、手段は何であろうと大会社に入れば良い……等。

上記事例に該当する学生の増加は、専門教育や卒業研究に深刻な影響を与えることが懸念されるが、実際にその徴候が現れはじめているとのことであった。

平成 23 年度から実施される学問基礎科目では、高校教育と大学教育のつながりの役割、言い換えると専門教育で学ぶ学問の基礎的事項の習得、特に当該学問領域における考え方と方法論の習得が求められている。しかしながら上記の報告は、香川大学に入学した学生の中に、「大学で学ぶための準備ができていない」者が相当の割合で存在することを示している。しかも質疑応答の際には、問題事例の追加が相次いだことから、本件は特定学部の問題ではなく、香川大学全体の問題であることは明らかである。

分科会後半のディスカッションでは、学生の学問に対するモチベーションの低さに問題があるとの指摘がなされ、学生のモチベーションを高めるための工夫が必要であるとの認識が共有された。しかしながら個々の教員の工夫だけで問題が解決される訳ではない。社会的・経済的な要因など、この問題の背景を明らかにしつつ、国レベルでの解決策を見出す努力が必要であるが、喫緊の課題として、いかにして「大学で学ぶための準備ができていない」学生のモチベーションを高め、専門教育に耐えられるレベルまで引き上げるかについて、学生教育に携わる全ての教員がこの問題を真剣に考え、知恵を出し合う必要がある。

4. 教養ゼミナール分科会

司会：佐藤慶太（大学教育開発センター）、記録：伊藤文紀（調査研究部委員・農学部）

大学教育開発センター・佐藤教員より、平成23年度から導入される新カリキュラムについて以下のように説明がなされた。

（1）新カリキュラムの全体像

現行カリキュラムと新カリキュラムを比較して全体像を確認し、教養ゼミナールが24年度からは大学入門ゼミとしてコミュニケーション科目のひとつとして開講される。

（2）平成23年度の過渡的措置について

現行カリキュラムでは、「大学入門ゼミ」と内容上重複する学部開設科目があるため、大学入門ゼミの全面的な実施は24年度とし、23年度は以下のような過渡的措置を取る。

- ・「教養ゼミナール」の名称を残し、内容を「大学入門ゼミ」に近付ける。
- ・「大学入門ゼミ」は原則的に「必修」だが、23年度はこれを見送る。
- ・学部開設科目として「基礎ゼミナール」を持つ経済学部は、「基礎ゼミナール」の内容を「大学入門ゼミ」に近付ける。

（3）旧「教ゼミ」と新「教ゼミ」の違い

理念として「責任感・協調性のある態度の涵養」があらたにあげられ、運営面では各学部がそれぞれのキャンパスで前期に開講し、内容面ではアカデミックリテラシーに関する授業を含める。

（4）アカデミックリテラシー

全学共通コンテンツとして5回のスキル教育プログラム（ノートのとり方、レポートの書き方、日本語技法（2回）、プレゼンテーションの方法）を含める。これらに関しては参考となるハンドブックやPPTファイルを提供する。また、FDを実施する。

佐藤教員による説明のあと、具体的な実践例として西本教員による22年度に実施した講義の内容についての紹介があり、その後各学部に分かれて話し合いの時間を持ち、質疑応答があった。参加者からは、全学コンテンツの取り扱い（具体的な実施の仕方）、全学コンテンツでもちいるテキストの内容、情報リテラシーとの内容の重複の可能性、グループワークの実施の仕方などについて質問や意見があり、これらについて佐藤教員が説明した。

5. 既習外国語分科会

司会・記録：岩中貴裕（大学教育開発センター）

大学教育開発センター所属英語担当教員より、平成 23 年度から導入される新カリキュラムについての説明がなされた。現行カリキュラムからの変更点として下記の 6 点について説明がなされた。

(1) 科目名

平成 23 年度より、既習外国語（英語）の授業科目名を下記のように変更する。

英語コミュニケーション基礎演習 → Communicative English I（2 単位）

英語コミュニケーション総合演習 → Communicative English II（2 単位）

英語コミュニケーション LR・SW 演習 I → Communicative English III（1 単位）

英語コミュニケーション LR・SW 演習 II → Communicative English IV（1 単位）

(2) 教科書

現行カリキュラムでは TOEIC 問題集を教科書とし、試験対策を主眼としている。新カリキュラムではこれを改め、4 技能をバランスよく扱った総合教材を使用する。1 年次前期の授業で使用する教科書は学部共通とする。1 年次後期の授業で使用する教科書は各授業担当者が決定する。大学教育開発センター所属英語担当教員が事前に選定した教科書の中から、各授業担当者が自分の授業で使用する教科書を選択する。

(3) 自習課題

現在のカリキュラムでは音読を自習課題として課しているが、新カリキュラムでは e-learning を導入する。学生が PC または携帯電話を使用して各自のペースで英語学習を行うことができるシステムを構築する。このシステムで学生は、「多肢選択」、「単語並び替え」、「ディクテーション」、「空所補充」という 4 種類の問題を合計で 1,400 問繰り返し解くことが可能になる。

(4) クラスサイズ

クラスサイズが現行の 35 人程度から、最大で 25 人になる。これにより従来よりも更に行き届いた指導が可能になり、授業内でコミュニケーション活動を行うことができる。

(5) 習熟度別クラスの導入

1 年次後期に実施される授業（Communicative English II）において、習熟度別クラスを導入する。今年度までは農学部のみで実施していたが、来年度からは全学部で実施する。

(6) 共通教科書の採用

全学部の学生が使用する香川大学共通英語テキストを導入する。この共通英語テキストを補助教材として使用し、TOEIC のスコア向上を目指す。

説明後、質疑応答を行った。参加者から、夜間主の学生を対象とした英語の授業についてもその内容を見直すことが必要ではないか、1 年次後期に実施する TOEIC のスコアを効果的に活用する方法を検討すべきである、シラバスの締め切りを 1 月下旬にして欲しい等の意見、要望が出された。

新カリキュラムは平成 23 年度から導入されるが、2 年次生を対象とした授業については平成 24 年度からの実施となる。新カリキュラムにおける 2 年次生を対象とした授業の運用については、平成 23 年度中に詳細を決定する予定であることを大学教育開発センター所属英語担当教員が説明した。

[参加者アンケート集計]

本研修会を受けて参考になったところ、お感じになったところなどをお書きください。

- ・教育という分野の基礎的なことを何も習わずに、先生として授業を行っていますから、今日のお話はたいへんためになりました。今後もいろいろと教えていただきたい。
- ・コーディネーターという仕事は科目領域間での調整や共通教育科目の研究等のお手伝いまではできないと存じます。
- ・よくわかりました。できればハンドブックをこの時に配付してもらえるとありがたいと思います。
- ・コード 少々自由度が低すぎる点が気になります。専門ならば3か4しかなく大学院は5か6、全学は1か3ということになります。到達度との関係で相対的なコード化を考える手もあるのではないのでしょうか。
- ・リメディアルとあなどってはいけないと思います。また大学でやる以上リメディアルにとどまっていたらいけないと思います。コード1ばかりを取った学生がしっかりした基礎力をつけたと言って良い水準のコード1授業をぜひいろいろ開いていきたいところです。
- ・水準コードと科目との関係がわかりにくいし、systematic でないような気がしました。時岡先生のお考えの方がよくわかりました。
- ・教養ゼミ分科会でグループワークのやり方を教わったのが有意義だった。
- ・全体の流れがやっとわかった。
- ・大まかに方向性は理解できた。
- ・かかわる先生方との話し合いの場があることは、ありがたい。
- ・第1部はまだ理解できていないことも多かったのですが、全体像が理解できてよかったですと思います。第2部はいろいろな先生の考え方や授業の問題が聞けて良かったと思います。
- ・学生の変化については、皆さん同じことを感じているようでした。結局個別の努力をうまく集める試みが必要かと思います。

大学教育開発センターでは、日々の教育活動に直接的に役立つようなFDスキルアップ講座等も実施しています。以下のうちで参加したいと思う講座がございましたら、その番号に三つまで○をつけてください。

学習評価の基本……………2	ルーブリックを作ろう……………0
わかりやすいシラバスの書き方……………1	パワーポイント基本技・便利技……………1
授業外学習を促すシラバス作成法……………4	超簡単動画教材作成法……………0
グループ学習のコツ……………2	授業双方向性を高めるクリッカー……………1
講義のための話し方入門……………4	学習動機を高める授業……………4
レポートの書き方の教え方……………5	心理学から見た教室デザイン……………1
e-ラーニング入門……………0	研究室運営方法のコツ……………3

その他、本研修会や教育 FD 活動、全学共通教育のあり方、あるいは広く本学の教育に関して望むことなどがございましたら、ご自由にお書きください。

- ・今後も教育の基本について教えていただきたい。よろしくお願いします。
- ・教養部を復活させてはいかがでしょうか。
- ・全学共通教育科目における主題科目の比重が大き過ぎるのではないか。学問基礎科目と異なり、人文学、社会科学、自然科学のバランスが取りづらく、学生が偏った履修をしている。例えばディプロマポリシーで人文学、社会科学、自然科学をバランスよく学習させようとしても、卒業要件にそれを組み込むことが難しい。
- ・もう少しコンパクトにしたらいかがでしょうか？
- ・教科書から授業に組み立てるスキルアップ講座があるとよい。
- ・(その他) 講義を受ける学生のマナーについて気になっているところがあります。ごみ等、黒板のよごれ。